

## 教材・教具の紹介

## 特別支援学校の自立活動の個別指導における外部専門家活用の効果 ー外部専門家活用シートを用いてー

渡 辺 大 倫\*

特別支援学校の自立活動の個別指導において、脳性まひの小学部6年児童を対象とした、外部専門家を活用した指導の効果について報告した。外部専門家との連携及び指導の改善に際し、「外部専門家活用シート」を作成して用いた。本シートには、指導場面における具体的な学習上の困難の状況のみでなく、個別の指導計画及び学習指導要領との関連を明確にし、外部専門家からの助言を指導の改善に役立てるためのツールとしての機能をもたせた。

本シートを活用した結果、外部専門家からの医療的な情報を自立活動としての手立てに還元し、成果を上げることができた。今後、本シートを用いた効果の検証の蓄積が、外部専門家を活用するためのシステムの構築に向けて期待されることが示唆された。

キー・ワード：特別支援学校 外部専門家 指導の改善 外部専門家活用シート

### I. はじめに

特別支援学校において、一人一人の障害の状態に応じたきめ細かな指導を一層充実していくために、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士をはじめとする医療分野等の外部専門家を活用することが求められている（文部科学省，2009）。しかし、近接領域である医療と教育とは言え、治療や訓練を中心とした医療的なアプローチと、子どもの全人的発達を支える教育的対応とでは、理論的な枠組みや指導方法に隔たりがあり、活用における困難さも多い。このことに関して山崎（2010）は、医療的支援の立場と自立活動の指導との考え方の相違を指摘しており、外部専門家との連携に際し、ともすれば医療的な情報を医療の資格のない教師がそのまま授業に取り入れてしまうことを危惧している。

これまで特別支援学校の授業における外部専門家の活用に関して、藤川・西沢（2010）、宮尾・木下・大山・下山（2010）らにより先進的な取り組みが報告されているが、いずれも医療機関の継続的な協力体制の下での実践であり、外部専門家が特別支援学校の授業に介入したケースである。多くの特別支援学校においては、外部専門家との連携体制の構築、また外部専門家からの助言や指導を実際の指導場面で生かすための組織的なシステムの確立に向けて模索している段階である。本校においても年に数回、理学療法士等を講師に招いて校内研修やケース会を実施しているが、具体的な指導に生かすための方法やその効果の検証はなされていない。たとえ濃密な連携が取れない状況であっても、外部専門家を活用した指導の効果の妥当性を明らかにしていく意義は大きいと考える。そうすることで、校内体制として外部専門家を活用するためのシステムの整備に向けた示唆が得られると考える。

そこで本研究では、外部専門家からの助言と自立活動の指導を有機的に連動させるため、「外部専門家活用シート」を作成した。そして本シートを連携のツールとして使用した自立活動

の実践を行い、その効果について検討することを目的とした。

### II. 実践の経過

#### 1. 外部専門家活用シート（資料1）

外部専門家活用シート				
児童生徒氏名		担当者名	外部専門家機関名・職種	
〇〇〇〇		浅辺 大倫	△△センター ・ 作業療法士	
身に付けさせたい力	・手を機能的に使い、誰にでも分かる方法で自己選択・自己決定をする力。自分の意思や好みを他者に伝えられることで、活動やコミュニケーションの幅を広げる。			
個別の指導計画の関連目標	・対象物を見て、手を動かして二者択一をする。			
自立活動の主な項目	・姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること(5-1) ・保有する感覚の活用に関すること(4-1)			
授業名	自立活動(かだい)			
指導内容及び手立て	・2枚のカードの中から1枚のカードに手を触れて選択することで、赤、青、黄の色の弁別をする。 ・カードの大きさや背景色を工夫して、色を識別しやすくする。			

学習又は生活上の困難の状況	外部専門家からの助言内容	授業改善に向けての助言内容の整理	指導内容・方法の改善	児童生徒の姿容
頭部の位置が安定せず、対象物を十分に注視できないまま、手を動かしてカードに触れて選択してしまう。	姿勢を少し前傾させる。また右肘を後方に引かないように補助すると、前を見て左手を動かしやすくなるのではないかと。	日常場面での姿勢にとらわれず、学習場面での望ましい姿勢について改めて検討する。	二者択一の学習をする際は、車椅子の背面の傾斜角度を65度から75度に変更し、より前傾姿勢で実施するようにした。	カードを見てから手を動かすことが増え、色弁別の正答率が増加した。
課題への集中の持続が難しく、集中が途切れると無造作にカードを選択してしまう。	本児の好みの遊びを学習に取り入れることで、課題への集中力が増すのではないかと。	学習内容にメリハリを付けるとともに、手を動かすことの楽しさを実感できるように課題を工夫して取り入れる。	手を動かして動物や魚のプリントされた紙片をテーブルから落とす活動、おもちゃに連動させたスイッチを押す活動を取り入れた。	前方への手の動きに加え、左右及び上下への意図的な手の動きが見られるようになった。笑顔で課題に取り組めることも増え、正答率はさらに増加した。

これまで外部専門家からの助言や指導の内容を、自立活動の具体的な指導に結び付けるまでに教師の不安や戸惑いがあることが指摘されてきた。そこで教師が外部専門家の知見を活用する目的を明確にし、得られた助言や指導を授業内容や方法の改

\* 愛知県立豊橋養護学校

善にスムーズに生かされるようにすることを目的に、外部専門家活用シートを作成した。なお本シートは筆者が発案し、内容を本校の校長、教頭を含めた管理職で検討し作成した。シートの作成に当たり、以下の5点に留意した。

- ・教師と外部専門家が共通理解のもとで話し合いができるよう、「身に付けさせたい力」を明確にし、指導の方向性を確認できるようにした。
- ・医療的なりハビリテーションの視点でなく、自立活動の指導をベースに話し合いができるよう、「個別の指導計画」及び「学習指導要領上の自立活動の内容」と授業とのつながりを整理できるようにした。
- ・具体的にピンポイントの助言を得られるよう、「学習上又は生活上の困難の状況」を明確に整理できるようにした。
- ・外部専門家からの助言や指導内容を教師がそのまま授業に持ち込むことがないよう、「授業改善に向けての助言内容の整理」の欄を設け、授業としてどう取り入れていくことができるかを検討できるようにした。
- ・授業改善後の「児童生徒の変容」を把握して評価を行い、次の課題に向けたフィードバックができるようにした。

## 2. 対象児の実態

- ・知的障害及び肢体不自由を有し、自立活動を主とした教育課程で学習する小6児童。
- ・四肢にまひがあり、日常生活全般で介助を要する。学校では車いすで過ごしている。
- ・「あ」、「で」等の発声や、快・不快の表情の変化により教師とやりとりしている。
- ・色の付いた絵カードなどを見て、注視したり手を伸ばしたりして興味を示すが、どの程度弁別できているかはっきりしない。
- ・月に1回、医療機関での作業療法に通院し、身体のリラクゼーション、遊びを通したスイッチ操作等、手指の巧緻性を高めるための訓練を行っている。
- ・遠城寺式・乳幼児分析的発達検査の結果は以下の通りである。

移動運動 : 0歳4-5か月  
 手の運動 : 0歳2-3か月  
 基本的習慣 : 0歳9-10か月  
 対人関係 : 0歳9-10か月  
 発 語 : 0歳6-7か月  
 言語理解 : 1歳2-4か月

## 3. 個別指導における課題の分析と仮説の推論

毎日設定されている「自立活動（かだい）」を外部専門家活用の指導場面として設定した。本授業では、個に応じた課題を20分程度、個別に学習している。対象児の個別の指導計画に「対象物を見て、手を動かして二者択一をする」という年間目標があり、本授業では赤、青、黄の色のカードの弁別課題に取り組んでいる。対象児は手指の動きに制限があるためカードを持つことはできず、効き手である左の手先をカードに触れて選択している。

二者択一をする対象児の目と手の動きからは、ある程度色の

弁別への理解ができていることが見て取れたが、頭が下がり、視線がカードに向かないまま手探りでカードに触れることも多く、機能的に手を動かして選択しているのかどうかははっきりしない状況であった。

そこで、対象児の二者択一に必要な行動のつながりを分析し、課題を焦点化した（表1）。対象児の行動観察から検討した結果、「①頭を上げて正面を見る」から「②提示されたカードを見る」までの姿勢の維持に困難さがあると推測された。また、意識の集中の持続が難しいことも課題として考えられた。以上の2点の改善が有効に作用するという仮説のもと、作業療法士からの助言を得て指導方法の改善を試みた。なお本研究では、指導の改善前の実態把握の段階で最も正答率の高かった、赤色を他の色と弁別する課題を分析対象とした。

表1 二者択一行動の分析

【細分化した行動の項目】	【必要とされる機能】
①頭を上げて正面を見る	体幹及び首の安定、平衡感覚
②提示されたカードを見る	視知覚能力
③指示された色を聞く	聴知覚能力
④2枚のカードを見比べる	色弁別の認知能力
⑤手を動かす	手の運動能力、固有覚
⑥対象物に触れる	触知覚能力
⑦正答を聞き、正答かどうか分かる	聴知覚・視知覚能力

## 4. 外部専門家との連携の方法

201x年4月から9月の間、筆者が対象児童のAセンター（医療機関）での作業療法の訓練に4度同行し、見学及び作業療法士との情報交換を行った。その中で、連携のツールとして作成した外部専門家活用シートを用いた。初回の連携の際、「身に付けさせたい力」について確認し、作業療法の訓練と自立活動の指導の方向性について共通認識した。その後、筆者が個別の指導計画及び学習指導要領を参考に本授業での指導における内容や手立て、また現状での困難の様子について整理した。2回目以降の連携から作業療法士に指導場面での具体的な内容及び方法、また困難な状況に対する仮説の推論に至るまでの経緯について説明し、助言や指導を依頼した。そして得られた助言を本シートで整理し、指導の改善に生かした。

## 5. 仮説に関する作業療法士からの助言

- ・助言①：姿勢に関して、後傾しているため、もう少し前傾し、右肘を後方に引かないように補助すると、前を見て左手を動かしやすくなるのではないかと。
- ・助言②：集中の持続に関して、本児の好みの遊びを学習に取り入れるとよい。

## 6. 指導の改善の経過

授業では色の弁別課題を週に2～3日程度実施し、合計で40セッション行った。直径7cmの円が描かれた、一辺の長さが10cmのカードを3枚用いた。円の色は赤、青、黄の各1色で、背景色は識別のしやすさに配慮し、いずれも黒であった。1セッションにつき、赤色と他の色（青色又は黄色）の2枚のカードを対象児の正面にランダムに10回提示し、「赤はどっち

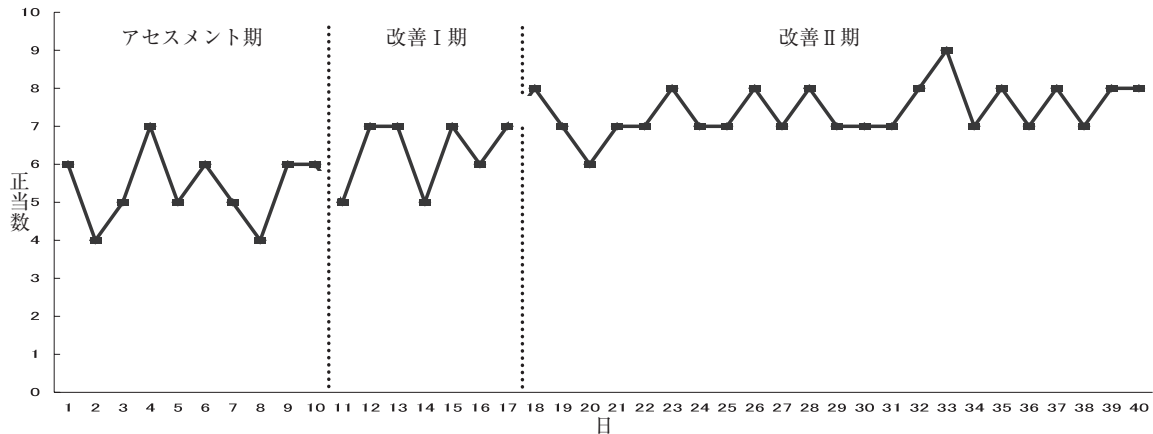


図1 色弁別課題の正当数の推移

ですか？」と質問した。そして対象児の手が最初に赤色のカードに触れることができたなら赤色を選択したと見なして正答とした。

- ・アセスメント期（セッション1～10）：指導の改善前の実態把握の期間として実施した（平均正答率54%）。
- ・改善Ⅰ期（セッション11～17）：助言①を受け、学習の際の車椅子の背面の傾斜角度を65度から75度に変更し、より前傾姿勢で実施した（平均正答率63%）。
- ・改善Ⅱ期（セッション18～40）：助言②を受け、色の弁別課題と並行して、手を動かして動物の絵のプリントされた紙片を、車いすのテーブルから落とす活動、またおもちゃに連動させたスイッチを押して楽しむ活動など、手を大きく動かす活動、目と手の協応動作を伴う活動を取り入れた（平均正答率74%）。

## 7. 対象児の学習状況の変容

指導の改善前のアセスメント期に比べ、改善Ⅰ期で姿勢の改善を行ったところ、頭部が上がるが多くなった。その結果、カードを見た上で手を動かしてカードに触れることが増えた。また改善Ⅱ期で遊びの要素を伴う学習を、弁別課題の前のウォーミングアップや課題後の楽しみとして取り入れた。手を前方へ差し出す動きに加え、左右、上下への動きも増え、動きの幅を広げられるようになった。結果として、手の動きがよりスムーズになった。なお改善Ⅰ期、改善Ⅱ期のいずれにおいても、正答率の増加が認められた（図1、資料1）。

また課題の最中、注意をそらすことなく取り組めることが増えた。さらに本授業に限らず他の場面においても、姿勢を助言に従い修正すると、周囲の教師や友達に目を向ける場面が多く見られるようになった。

## Ⅲ. 考察

一人一人に応じた適切な指導を実現するために、外部専門家の知見を活用する意義は大きい。しかし授業は教師が責任をもって計画し実施するものであり、外部専門家からの助言に委ねてしまうことのないよう、留意しなければならない。助言を適切に活用しなければ、その効果を自立活動の指導に生かすことは難しいだろう。友永（2005）は教師に求められる特性とし

て、子どもの的確な実態把握と外部専門家等の情報を生かせる力が必要であると述べている。そのためには、助言を生かすプロセスにおいて、自立活動の目標や内容を押さえ、実践することが求められるであろう。

そして本研究で外部専門家の知見の活用が、自立活動の指導の改善への効果を得られたことで、今回作成した「外部専門家活用シート」は、外部専門家を活用するための方法論の1つとしての役割を担うことができたと考える。

一方で、本研究における自立活動の指導における対象児の変容は、外部専門家の活用の効果単独のものなのか、繰り返しの指導の成果によるものなのか、確定できない点が課題として挙げられる。しかし少なくとも自立活動の指導において、本シートを用いて一定の効果が得られたことは否定できない。

本研究の実践はほんの一事例に過ぎない。個々に多様な特性や困難さを有する特別支援学校のすべての児童生徒に、外部専門家の活用による学習効果が得られるとは限らないが、その効果の中身についてさらなる実践を蓄積し、検証していくことが求められる。その際、ツールとしての本シートの活用が一助となるのではないかと考える。そして本シートの汎用性を高め、学校組織としての外部専門家活用システムを整備していくことで、個別の指導計画を踏まえた自立活動の指導の向上に寄与できると考える。

## 文献

- 藤川雅人・西沢勝則（2010） 理学療法士との連携による授業改善の取組（2）－外部専門家とのケース会を通して－. 第48回日本特殊教育学会発表論文集.
- 宮尾尚樹・木下裕一郎・大山智恵美・下山直人（2010） 外部専門家を活用した教員の専門性の向上：指導方法の改善・充実をめざして. 第48回日本特殊教育学会発表論文集.
- 文部科学省（2009） 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編. 海文堂出版.
- 友永光幸（2005） 自立活動の実践と教師の専門性. 肢体不自由教育, 172, 30-35.
- 山崎剛（2010） 特別支援学校の自立活動における教師と外部専門家の連携について. 上越教育大学大学院修士論文（未公開）.